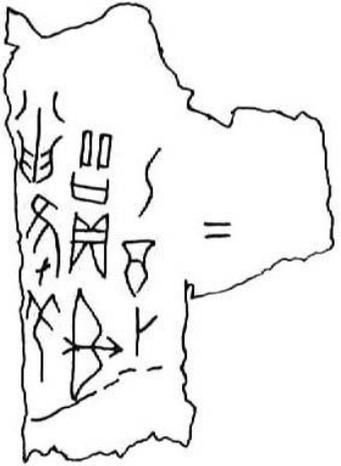


王 辰 卜 其 祭

祭 于 三 禾

三 禾 又

又 禾



先生と私は、井戸を覆うスイカズラの香りに誘われ、その方向へ小道を歩いて行った。誰かが井戸水を汲んでいた。先生は、私の片手をとり水の噴出口の下に置いた。冷たい水がほとばしり、手に流れ落ちる。その間に、先生は私のもう片方の手に、最初はゆつくりと、それから素早く *water* と綴りを書いた。私はじつと立ちつくし、その指の動きに全神経を傾けていた。すると突然、まるで忘れていたことをぼんやりと思いついたかのような感覚に襲われた――感激に打ち震えながら、頭の中が徐々にはっきりしていく。ことばの神秘の扉が開かれたのである。この時はじめて、*water* が、私の手の上に流れ落ちる、このすてきな冷たいものことだとわかったのだ。この「生きていることば」のおかげで、私の魂は目覚め、光と希望と喜びを手にし、とうとう牢獄から解放されたのだ！もちろん障壁はまだ残っていたが、その壁もやがて取り払われることになるのだ。

井戸を離れた私は、学びたくてたまらなかった。**すべてのものには名前があった**。そして名前をひとつ知るたびに、新たな考えが浮かんでくる。家へ戻る途中、手で触れたものすべてが、**いのちをもって震えているように思えた**、今までとは違う、新鮮な目でものを見るようになったからだ。家の中へはいるとすぐに思い出したのは、壊した人形のことだった。手探りで暖炉のところまでたどり着き、破片を拾い上げる。もとに戻そうとしたが、もうもとは戻らない。目は涙でいっぱいになった。何とひどいことをしたのがわかったのだ。この時、私は生まれてはじめて**後悔と悲しみを覚えた**のだった。

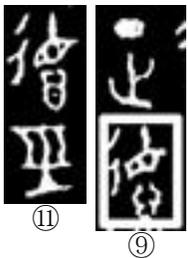
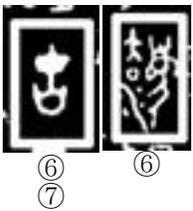
* The story of My Life(Helen Adams Keller).

We walked down the path to the well-house, attracted by the fragrance of the honeysuckle with which it was covered. Some one was drawing water and my teacher placed my hand under the spout. As the cool stream gushed over one hand she spelled into the other the word water, first slowly, then rapidly. I stood still, my whole attention fixed upon the motions of her fingers. Suddenly I felt a misty consciousness as of something forgotten – a thrill of returning thought; and somehow the mystery of language was revealed to me. I knew then that **water* meant the wonderful cool something that was flowing over my hand. That living word awakened my soul, gave it light, hope, joy, set it free! There were barriers still, it is true, but barriers that could in time be swept away.

I left the well-house eager to learn. **Everything had a name**, and each name gave birth to a new thought. As we returned to the house every object which I touched **seemed to quiver with life**. That was because I saw everything with the strange, new sight that had come to me. On entering the door I remembered the doll I had broken. I felt my way to the hearth and picked up the pieces. I tried vainly to put them together. Then my eyes filled with tears; for I realized what I had done, and for the first time I felt **repentance and sorrow**.



大孟鼎（紀元前1003年？） 西周前期



「大克鼎」 西周中期

『大孟鼎』銘文現代日本語訳（諸説あります）抄

【第一段】序。孟は宗周において康王より冊命された

① 佳（唯）九月、王才（在）宗周、令（命）孟。

唯れ九月、（周の康）王は宗周に在りて、（臣下である）孟に命ず。

【第二段】文王、武王の徳を讃え、周が正統である理由と殷が滅んだ理由を述べる

② 王若曰

王若（かくのごと）く曰く。

③ 「孟。不（丕）顯玆（文）王、受天有大命（命）杜（在）珷（武）王嗣玆（文）

「孟よ。丕顯なる文王は、天有大命（天命）を受け、武王に在りては文王を嗣ぎ、

④ 乍（作）邦、鬪卒（厥）匪（慝）匍（敷）有（佑）三（四）方、眈（駿）正阜（厥）民。

国を作り、（殷の）隠れた悪を開き、四方を普く領有し、大いに民を導いた。

⑤ 杜（在）季（於）御（御）事、戯（及）酉（酒）無釳（敢）酖、有崇蒸祀無釳（敢）擾

御事（祭祀）においては、酒を飲んでも決して酔うことなく「有崇蒸祀」の祭りにおいても決して乱れることがなかった。

⑥ 古（故）天異（翼）臨子、灋（法）保先王、匍（敷）有三（四）方。

ゆえに（故）天の靈（天翼）は来臨し、慈しみ、先王（成王）を大いに保んじ、四方を普く領有せしめた。

⑦ 我聒（聞）殷述（墜）令（命）佳（唯）殷傷（邊）疾（侯）田（甸）、季（與）殷正百辟率肆（肆）

于（於）酉（酒）。古（故）喪自（師）。

私（王）はこのように聞いている。「殷が天命を墜としたのは、殷の辺侯・田、および朝廷内外の百官らがみな酒におぼれたからだ」と。ゆえに（故）殷は軍隊（あるいは人民）と国家の命運とを失った。

【第三段】文王の正徳に法り、忠心に職を務め、自分を補佐し、政治・軍事に勤めるよう命じる。

⑧ 已（已）女（汝）妹（昧）辰又（有）大服（服）、余佳（唯）即朕（朕）小學。

ああ、汝（孟）は幼い頃から要職を継ぎ、私はお前を我が小学で学ばせた。

⑨ 女（汝）勿勉（逸）余乃辟一人、

お前は私に離反することがあつてはならない。

⑩ 今我佳（唯）即井（型）冏（稟）于（於）玆（文）王正徳、若玆（文）王令（命）二三正。今

余佳（唯）令（命）女（汝）孟、豊（紹）榮（榮）

今、私は「型」にのっとり、文王の正徳を継承し、文王の命じた二三正（大臣）のごとくに、汝、孟に命じて私を補佐させよう。

⑪ 苟（敬）讎（擁）徳罔（經）、敏朝夕入諫（諫）、言（享）奔歪（走）、畏天畏（威）。

徳經を敬い、和し、敏（つと）めて朝に夕に諫（いさめ）を入れ、あつく奔走して天畏を畏れよ、と。以下略

『論語』より

《徳と刑》

子曰はく、これを道びくに政を以てしこれを齊うるに刑を以てすれば、民免れて恥ずること無し。これを道びくに徳を以てしこれを齊うるに禮を以てすれば、恥ありて且つ格（ただ）し。

子曰、道之以政、齊之以刑、民免而無恥、道之以徳、齊之以禮、有恥且格、02-03

子曰はく、政を爲すに徳を以てすれば、譬えば北辰の其の所に居て、衆星これを共するが如し。

子曰、爲政以徳、譬如北辰居其所、而衆星共之、02-01

●法のプログラミング

●心のプログラミング

《過ち》

子曰はく、君子、重からざれば則ち威あらず。學べば則ち固ならず。忠信を主とし、己れに如かざる者を友とするなかれ。過てば則ち改むるに憚ること勿かれ。

子曰、君子不重則不威、學則不固、主忠信、無友不如己者、過則勿憚改、01-08

《如之何》

子曰はく、如之何（いかん）如之何と曰わざる者は、吾れ如之何ともすること末きのみ。

子曰、不曰如之何如之何者、吾末如之何也已矣、15-16

《用心、博奕》

子曰はく、飽くまで食らいて日を終え、心を用うる所なし。難いかな。博奕なる者あらずや。これを爲すは猶お已むに賢れり。

子曰、飽食終日、無所用心、難矣哉、不有博奕者乎、爲之猶賢乎已、17-22

《切磋琢磨》

子貢曰はく、「貧くして諂うこと無く、富みて驕ること無きは、何如」

子曰はく「可なり。未だ貧しくして道を樂しみ、富みて禮を好む者には若かざるなり」
子貢曰はく「詩に云う。『切するが如く磋するが如く、琢するが如く磨するが如し』

とは、其れ斯れを謂うか」

子曰はく、「賜や、始めて與に詩を言う可きのみ。諸れに往を告げて來を知る者なり」

子貢曰、貧而無諂、富而無驕、何如、子曰、可也、未若貧樂道、富而好禮者也、子貢曰、詩云、

如切如磋、如琢如磨、其斯之謂與、子曰、賜也、始可與言詩已矣、告諸往而知來者也、01-15

《皆から好かれる》

子貢問曰はく「郷人皆これを好（よみ）せば何如。

子曰はく「未だ可ならざるなり」

「郷人皆これを惡（にく）まば何如」

子曰「未だ可ならざるなり。郷人の善き者はこれを好し、其の不善なる者はこれを惡まんに如かざるなり」

子貢問曰、郷人皆好之何如、子曰、未可也、郷人皆惡之何如、子曰、未可也、不如郷人之善者好之、其不善者惡之也、13-24

【方法論】 思、知、学、文、礼、君子と小人

《思・九思》

孔子曰はく「君子に九思あり。

視るには明を思い、※

聽くには聰を思い、

色には温を思い、

貌には恭を思い、

言には忠を思い、

事には敬を思い、

疑わしきには問を思い、

忿りには難を思い、

得るを見ては義を思う」

孔子曰、君子有九思、視思明、聽思聰、色思温、貌思恭、言思忠、事思敬、疑思問、忿思難、見得思義、16-10

※《明↓聡明》

子張、明を問う。

子曰はく「浸潤の譖（そしり）、膚受の愬（うったえ）、行なわれざる、明と謂うべきのみ。浸潤の譖、膚受の愬、行なわれざる、遠しと謂うべきのみ。

子張問明、子曰、浸潤之譖、膚受之愬、不行焉、可謂明也已矣、浸潤之譖、膚受之愬、不行焉、可謂遠也已矣、12-06

《知》

子曰はく、故きを温めて新しきを知る、以て師と爲（る）べし、02-11

子曰、温故而知新、可以爲師矣、02-11

《知る、好む、楽しむ》

子曰はく、これを知る者はこれを好む者に如かず。これを好む者はこれを樂しむ者に如かず。

子曰、知之者不如好之者、好之者不如樂之者、 06-20

《学》

子曰、學びて時にこれを習う。亦た説ばしからずや。朋有り遠方より來たる、亦た樂しからず、人知らずして慍みず、亦た君子ならずや

子曰、學而時習之、不亦説乎、有朋自遠方來、不亦樂乎、人不知而不慍、不亦君子乎 01-01

《文》

子貢問うて曰はく、「孔文子、何を以てかこれを文と謂うや」

子曰はく「敏にして學を好み、下問を恥じず、是（ここ）を以てこれを文と謂うなり」

子貢問曰、孔文子何以謂之文也、子曰、敏而好學、不恥下問、是以謂之文也、 05-15

《礼》

子曰はく、恭にして禮なければ則ち勞す。

慎にして禮なければ則ち憊す。

勇にして禮なければ則ち亂る。

直にして禮なければ則ち絞す。

君子、親に篤ければ則ち民、仁に興こる。

故舊遺（わす）れざれば、則ち民偷（うす）からず。

子曰、恭而無禮則勞、慎而無禮則憊、勇而無禮則亂、直而無禮則絞、君子篤於親、則民興於仁、故舊不遺、則民不偷、 08-02

《文と礼の機能》

顔淵、喟然（きぜん）として歎じて曰はく、

これを仰げば彌々高く、これを鑽れば彌々堅し。

これを瞻るに前に在ば、忽ち後に在り。

夫子、循循として善く人を誘う。

我を博むるに文を以ってし、我を約するに禮を以てす。

罷まんと欲するも能わず。既に吾が才を竭（つ）くす。

立つ所ありて卓爾（たくじ）たるが如し。

これに従がわんと欲すと雖ども、由なきのみ。

顔淵喟然歎曰、仰之彌高、鑽之彌堅、瞻之在前、忽焉在後、夫子循循善誘人、博我以文、約我以禮、欲罷不能、既竭吾才、如有所立卓爾、雖欲從之、末由也已、 09-11

《君子と小人》